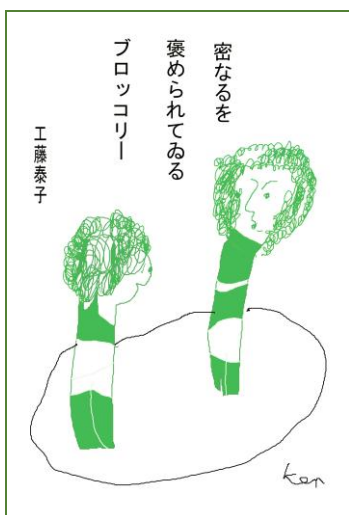




テーブルに鶯餅の鳴いた跡

八塚一青

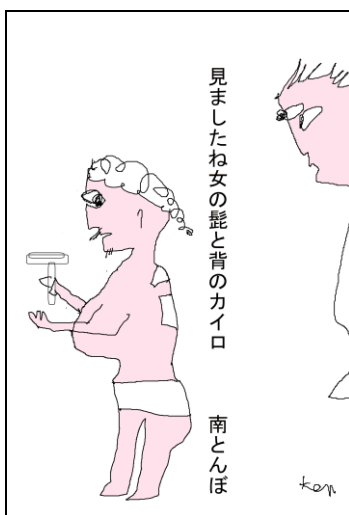
おやっ、きな粉らしきものがこぼれている。鑑識眼もするどく推理力を駆使して一句に仕上げたね。鶯餅が鳴いたという断定もよろしいですね。



密なるを褒められてゐるブロッコリー

工藤泰子

俳句は対象を凝視した時に生まれる。滑稽句もそこから生まれる。この句はその典型。じっと見ると気付く。「セロリーに樹木願望あるらしく」。



見ましたね女の髭と背のカイロ

南とんぼ

見たのは男で、見られた女は当然のこと作者自身であろう。髭もカイロもバレたからにはあきらめる他ない。それともいっそ開き直るか。



幸福はひらけば終わる福袋

久我正明

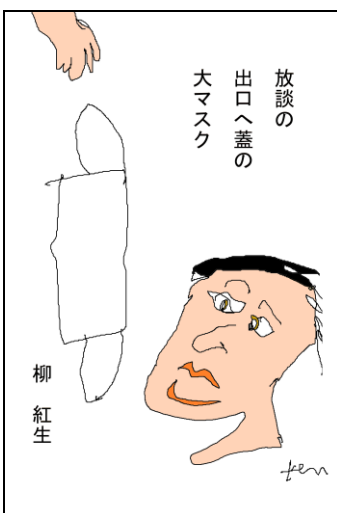
なるほどね。それなりの人生経験があり物事を達観していないとこんな句はできぬ。重厚なようで軽く、軽いようで重みがある。人生は福袋だね。



咬みこんで無口貫く冬の鍵

森岡香代子

暗くなつての帰宅。玄関の鍵穴に鍵を差し込んだが、回りもせず抜けもせず。鍵穴は鍵を啜えたまま両者だんまり。どっちも頑固だからねえ。



放談の出口へ蓋の大マスク

柳 紅生

オリンピックは開催すべきか中止すべきか、ワクチンは打つべきか止めるべきか、みなそれぞれに言いたい放題。お口には大きめのマスクが必須です。